

Honda Mobilityland Corporation

Sustainability and Economy Report 2026

Ver. 1 (2026年8月発行)

HONDA
Honda Mobilityland



HONDA

Honda Mobilityland

ホンダモビリティランドは、
地域社会とともに歩む企業として、
持続可能な未来の実現に向けた
取り組みを進めています

ホンダモビリティランド株式会社
代表取締役社長

齋藤 毅



サステナビリティは、モータースポーツ事業を中核とする当社にとって重要なテーマです。

未来世代への責任を果たすとともに、地域・行政・企業・来場者など多様なステークホルダーの期待に応えるべく、環境・社会・経済の各側面から持続的成長を目指して取り組んでいます。鈴鹿サーキットでは国際自動車連盟（FIA）の環境認証プログラム最高位となる3つ星を、日本のパーマナントサーキットで初めて取得しました。モビリティリゾートもてぎでは、人と自然とモビリティの融合をテーマに、里山や生物多様性の保全に取り組んでおり、2023年に日本で初めてOECM認証を取得し、環境教育の場として重要な役割を果たしています。

当社は、モータースポーツイベント開催に伴うCO₂排出量を2030年までにネットゼロとする目標を掲げています。

FORMULA 1 JAPANESE GRAND PRIXでは会場運営におけるScope1・2でカーボンニュートラルを達成しました。物流や来場者移動に伴うScope3のCO₂排出は、集客型事業に共通する重要な社会課題であり、パートナー企業との連携を戦略の柱と位置づけ、来場者も参加いただける取り組みを通じ、地域社会への貢献と環境負荷低減の両立を図っています。

MotoGP™ Grand Prix of Japanにおいては、観戦環境の向上や新たな交通アクセスの確立、地域との実効性ある共創に取り組むとともに、モビリティリゾートもてぎにおける里山の森林保全や生物多様性の維持・再生を通じて、持続可能な地域社会との連携を深め、活動のさらなる拡大を目指しています。

こうした取り組みの結果、鈴鹿サーキットは「Formula 1 Promoter Awards 2025」において、ESG部門最優秀賞「ESG Changemaker presented by Allwyn」を受賞しました。

再生可能エネルギーの活用や資源循環、低炭素モビリティの推進、地域社会への価値提供など、ESGの観点に基づく取り組みが評価されたものと受け止めています。

本レポートでは、当社事業が創出する経済的価値に加え、環境負荷低減や地域社会に対する活動実績を紹介しています。

今回の受賞を新たな出発点とし、モータースポーツを通じたサステナビリティの実践をさらに進化させてまいります。鈴鹿サーキットおよびモビリティリゾートもてぎを通じて、モビリティ文化の醸成と人材育成の実践フィールドを活かして、環境や地域社会とともに持続可能な未来づくりに向けた挑戦を続けてまいります。

本レポート の構成

本レポートでは、当社が推進するサステナビリティ活動に加え、FORMULA 1 JAPANESE GRAND PRIX
及びモビリティリゾートもてぎにおける環境・社会への配慮と挑戦についてご紹介します。

トップメッセージ	2
本レポートの構成	3
第1章 ホンダモビリティランドの軌跡と未来 - 創業者の想いを辿る鈴鹿サーキットとモビリティリゾートもてぎ	4
第2章 FORMULA 1 JAPANESE GRAND PRIX 2026 のインパクト - 世界に発信する文化・経済の交差点としての可能性	10
第3章 FORMULA 1 JAPANESE GRAND PRIX 2026 のサステナビリティ - 次世代へ届ける持続可能な社会の共創	18
第4章 モビリティリゾートもてぎのサステナビリティ - 人と自然とモビリティが共生する循環型モビリティの実践	31
今後の展望	34



“おれはサーキットが欲しいんだ。
レースをやらなければ、クルマは良くなるらない。”

本田 宗一郎

第1章

創業者の想いを辿る 鈴鹿サーキットと モビリティリゾートもてぎ

ホンダモビリティランドの軌跡と未来



“そこには遊園地を開設すべきだ。
それは自動車遊園地で、自分で操縦する楽しみを味わえる
のりものだけにするんだ。”



藤澤 武夫

創業者の想いを形にした 鈴鹿サーキット

1962年、日本初の本格的なレーシングコースとして誕生し、モータースポーツとモビリティ文化の発展に貢献し続けてきました。

モータースポーツを核にしたエンターテインメントと学びの機会を提供し、子どもから大人まで世界中の人を惹きつけ、モビリティによる「喜び」「楽しさ」「感動」を提供し続けています。

国際的なレースを開催する、

FORMULA 1 ARAMCO
JAPANESE GRAND PRIX 2026

日本を代表するモータースポーツの聖地

世界中のファンと

ドライバー・ライダーを魅了

2026 FIM世界耐久選手権
“コカ・コーラ” 鈴鹿8時間耐久ロードレース
第47回大会



代表的な
アトラクション

キッズバイク

子どもの成長と親の感動が日常的に生まれる体験型アトラクション。初めてのバイク操作をスタッフが個別にサポートし、転んでも安全な設計から、子どもは安心して繰り返し挑戦することができる。

鈴鹿サーキットパーク

小さな子どもでも自身で操ることができるのりものが豊富に揃い、モビリティを中心としたチャレンジ体験を親子で楽しみながら、子どもの成長を実感できることが特徴

交通教育センター

モビリティ社会の一員として、のりものを操る「人間教育」をテーマに、年齢や経験に応じた実践的なプログラムで交通安全と責任ある行動を学ぶ機会を提供

2025 FIM MotoGP™
World Championship Round 17
MOTUL Grand Prix of Japan



2輪ロードレースの

世界最高峰MotoGP™

豊かな自然環境を活かした

レース開催

2026 Hertz FIM Trial World
Championship Round1 NIPPON ROAD
TrialGP of Japan



パークエリア

生態系をテーマにした立体迷路やアスレチックを通じて、地中の生きものや植物、昆虫、小動物などの食物連鎖を、子どもから大人まで遊びながら理解できる体験を提供している

ハローウッズ

場内には約5,800種の生物種が確認されており、植物や昆虫などの生きものを観察する自然フィールドや、親子で楽しめる体験プログラムが充実し、溢れる生命を自ら体験し発見する「きっかけの場」を提供

自然とモビリティを融合した モビリティリゾートもてぎ

1997年、「人と自然とモビリティの融合」をテーマにオープンし、レーシングコースに加え、豊かな自然を活かした体験施設や安全運転普及活動によってモビリティ文化の創造に貢献しています。

自然環境の中で開催される世界最高峰のレース観戦に加えて、里山を活かしたアトラクション体験はチャレンジすることで成長を実感し遊びながら生態系のおもしろさや大切さ、興味を持つきっかけを醸成します。
モビリティリゾートもてぎでは、持続可能性の追求によりさらなる発展を目指します。

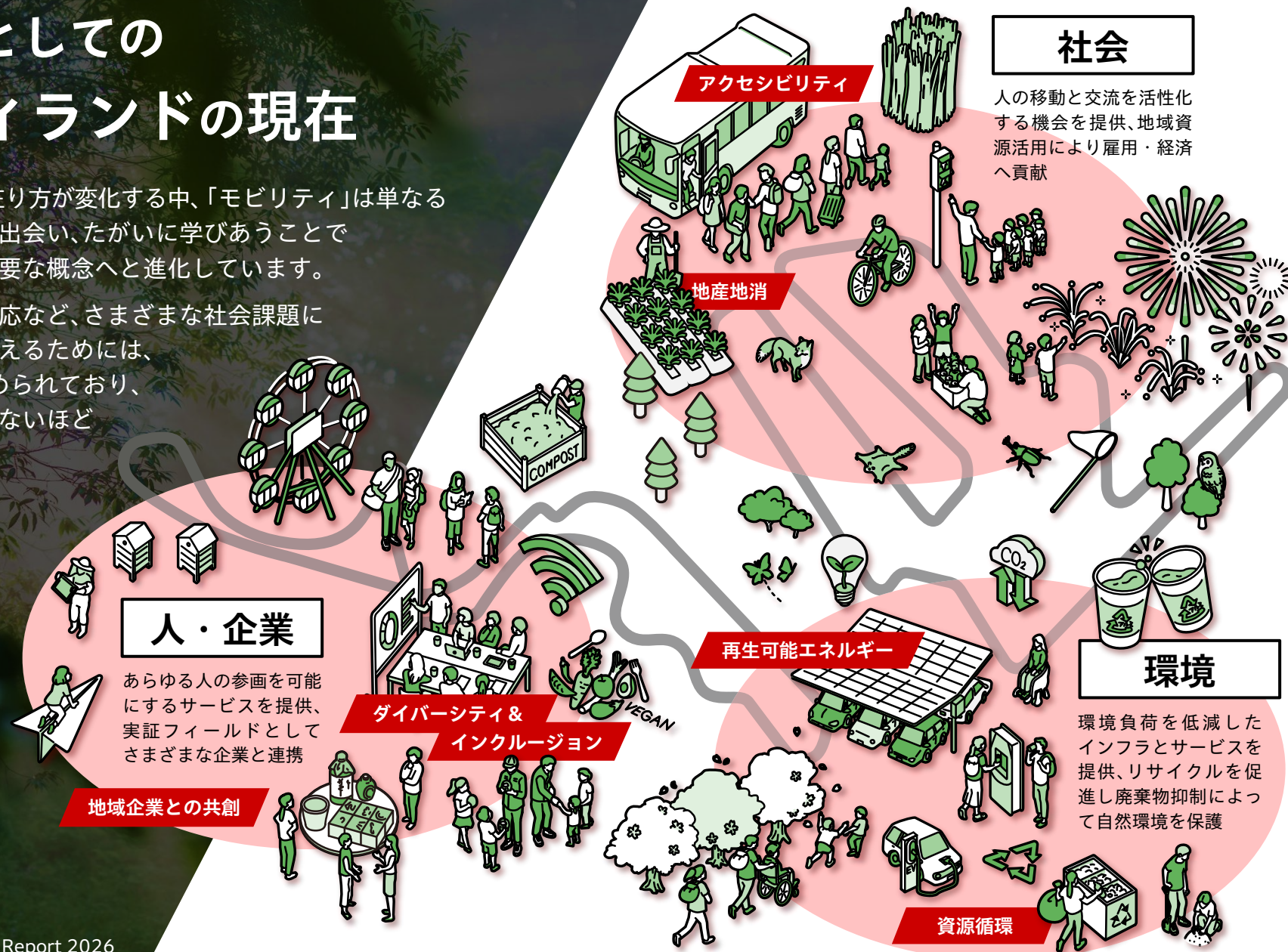


実証フィールドとしての ホンダモビリティランドの現在

時代の流れとともに、人やモノの移動の在り方が変化する中、「モビリティ」は単なる移動手段にとどまらず、さまざまな人が出会い、たがいに学びあうことで新たな文化が生まれ、社会を形づくる重要な概念へと進化しています。

いま、私たちは地球環境や多様性への対応など、さまざまな社会課題に直面しています。こうした課題を乗り越えるためには、より高度で柔軟なモビリティの姿が求められており、それを支える実証フィールドが、かつてないほど重要になっています。

これからも私たちは、企業や地域社会とともに、挑戦と実証を通じて社会課題の解決に取り組み、人・企業・環境・地域社会すべてにとって、持続可能で豊かな未来の実現に貢献してまいります。



ホンダモビリティランドの サステナビリティ

- カーボンニュートラルに向けて -

中核事業であるモータースポーツイベント開催に関わる
温室効果ガスの排出量削減に取り組み、
2030年にカーボンニュートラルを目指します。

2030

NET

ZERO



再エネ・代替燃料の活用



低炭素移動の促進



廃棄物の削減・資源循環



CO₂排出量の削減

多様な主体との連携による サステナビリティの推進

数々の国際レースにおいて、各種団体・行政・教育機関との連携の輪を広げております。



ル・マンとの連携による
表彰制度「ポジティブアワード」

鈴鹿地域連携イベント
バイクであいたいパレード

Le Mans Suzuka Positive Award

“コカ・コーラ” 鈴鹿 8 時間耐久ロードレース 第47回大会における取組み

参戦チームや地域・来場者を中心に、企業や教育機関とも連携した取組みを推進

ル・マンとの連携により創設され、参戦チームを対象に、環境・社会・運営面の取り組みを評価・表彰し、チーム間の意識の向上と持続可能な大会運営を促進

地域住民や来場者と連携した交通安全啓発・地域活性化イベント。鈴鹿市街～サーキット間を約600台が走行し、地域との一体感を醸成

2026 Hertz FIM トライアル世界選手権 第1戦 日本道路 日本グランプリにおける取組み

「社会・環境・経済」を軸に、持続可能なモーターサイクルスポーツの実現を目指す
KiSS (Keep it Shiny and Sustainable) の取組みを推進

ライダーとの連携による
森林保全活動

ライダーと連携し、植樹などの森林保全活動を実施することで、豊かな動植物の保全につなげ、自然と共生するレースの実現に貢献

もてぎ地域・教育機関との
連携による交流機会の創出

「もてぎフェスタ2026」や町民感謝デーの実施に加え、真岡工業高校の生徒が競技セクション設営に参画することで、地域との交流機会を創出



バイクであいたいパレード



植樹活動



もてぎフェスタ

第2章

世界に発信する 文化・経済の交差点 としての可能性

FORMULA 1 JAPANESE GRAND PRIX 2026 のインパクト



世界最高峰の スポーツエンターテインメント

FORMULA 1 は、世界最高峰の技術とアスリートが集結する、モータースポーツの頂点です。

レースでは、時速**370km/h**を超えるスピード、
約**2秒**のタイヤ交換など、世界でわずか**22人**のドライバーによる技術と、
チームワークそしてメカニック・エンジニアの研究開発により
世界一を決めるチームスポーツ。

2026年は**11チーム**が参戦。

マシンを自在に操るドライバーには、
集中力、わずかな判断ミスも
許されない高い知性と身体能力が求められます。

マシンには速さと安全性を両立させる
最先端の技術が詰め込まれ、その技術は市販車へ
フィードバックされています。

こうした戦いが、

年間**24戦**、**5大陸**で開催され、

1レースあたり平均**7,610万人**が視聴しており、
他のスポーツを圧倒しています。

7,610万人

イベント当たりの平均視聴者数の比較

単位: 万人

1,078

WBC
Final

1,870

NFL

2,060

NBA
Final

F1®

出典: Formula 1 提供資料

FORMULA 1の グローバル成長、 多様化するファン層

FORMULA 1は、近年著しい成長を遂げ世界的に影響力を持つスポーツです。2025年の全世界での視聴者数は18.3億人、ファン規模は8.2億人に達し、その注目度はさらに高まっています。

この成長の背景には、Netflixの人気シリーズ「Drive to Survive」や映画「F1®/エフワン」の世界的ヒットや、FORMULA 1公式・チーム・ドライバーによるSNSでの積極的な情報発信があります。長年FORMULA 1を支えてきたレガシーファンに加えて、特に女性や若年層を中心に新たなファン層を獲得しており、今後も老若男女問わず愛されるスポーツとしてのファン層の拡大が期待されます。

世界中の注目が集まるFORMULA 1は、開催国の技術や文化を発信する貴重な機会でもあり、その影響力を活用する意義はますます高まっています。

全世界配信視聴者数

18.3億人

(前年比) +1.8億人

年間現地来場者数

670万人

(前年比) +19万人

SNSフォロワー数

1.14億人

(前年比) +1,700万人

F1®ファン数

8.27億人

女性ファン

42%

35歳以下

43%

出典：Formula 1 提供資料

ソーシャルメディア

エンゲージメント

20億
NHL

160億
NFL

160億
NBA

270億
F1®

年内フォロワー増加率

2.1%
NBA

3.3%
NHL

16%
MLB

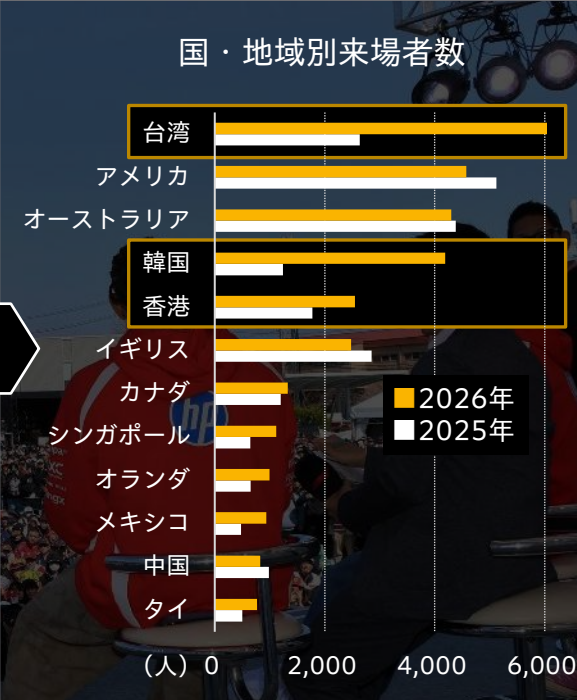
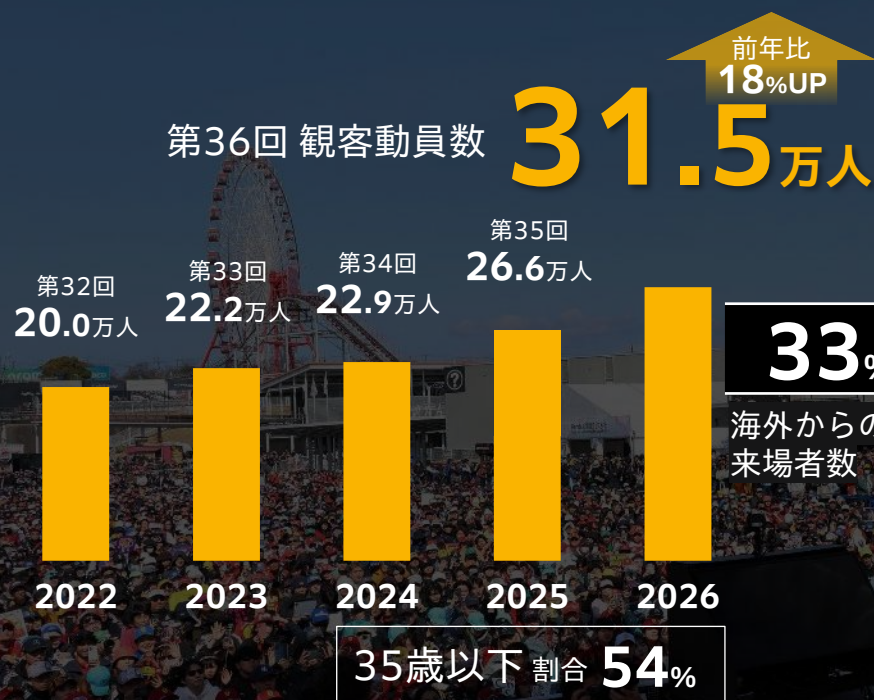
21.5%
F1®

出典：Formula 1 提供資料

世界の熱視線を集める JAPANESE GRAND PRIX

2026年のJAPANESE GRAND PRIX観客総動員数は31万5000人を記録し、国内外のファンから大きな注目を集めました。

また、春開催による満開の桜とFORMULA 1の共演がSNSなどで拡散され、観光を兼ねた訪日客が増加し海外からの注目度も急上昇しています。特に東アジア諸国からの来場が急増しており、中でも台湾は顕著な伸びを示しています。さらに、35歳以下の来場者の比率も年々上昇しており、F1®人気の世界的な拡大が観客層の多様化として表れています。



出典：2026 JAPANESE GRAND PRIX来場者アンケート

JAPANESE GRAND PRIX 観客累計総動員数

931万人

ホームレースへの関心

世界**1**位

日本

92%

世界平均

75%

出典：2025 Global F1® Fan Survey

日本の美と革新を 世界へ

JAPANESE GRAND PRIXは、モータースポーツの祭典であると同時に、日本文化を世界に届ける貴重な発信の場であり、戦略的な波及を可能にするプラットフォームとして、極めて大きな可能性を秘めています。こうした機会をさらに拡張することで、日本の価値向上と国際的な存在感の拡大に貢献します。

Paddock club™

世界のVIPゲストに「おもてなし」を提供。一流の料理人による地元名産品の提供や、伝統舞踊などのパフォーマンスを通じ、各国の要人に日本の文化と精神を五感で伝える。

7,610万人

2025年の1Grand Prix™あたりの
平均視聴者数

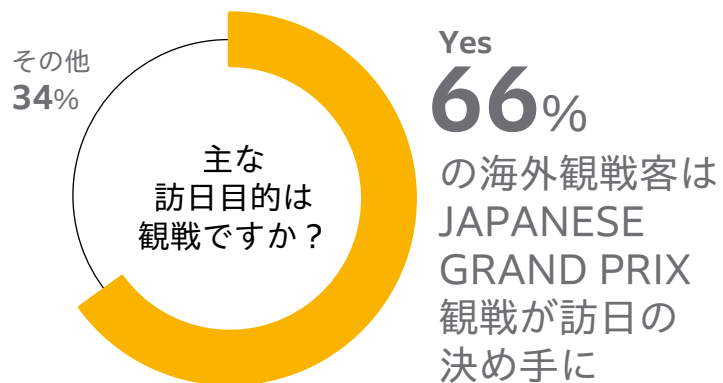
オープニングセレモニー

スタートの瞬間を現地で体験する観客に加え、配信を通じて視聴する7,610万人の観客に向けて日本をプレゼンテーションする舞台となっている。今年はYOSHIKIによる国歌演奏や、アバンギャルディのダンスパフォーマンス、力士の出演などが披露され、日本文化の多様な魅力が世界へ広く発信された。

出典：Formula 1 提供資料

海外観戦客が JAPANESE GRAND PRIXの 経済効果を牽引

JAPANESE GRAND PRIXを目的とした海外からの訪日観戦者は、滞在期間中に平均76万円超を支出しています。これは国内観戦者の4.8倍であり、一般的な訪日観光客の3.3倍に相当します。さらに、約7割の訪日観戦者は7日間以上日本に滞在し、鈴鹿のみならず、他の都市も訪れています。その間の宿泊、交通、飲食、観光、買物などの支出が三重県や日本への経済効果を押し上げています。



海外からの観戦者 ✈️

1人あたりの
滞在期間中平均消費額

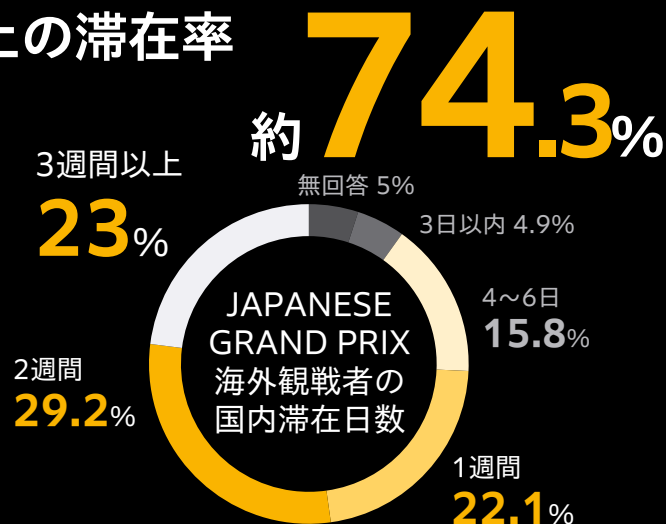
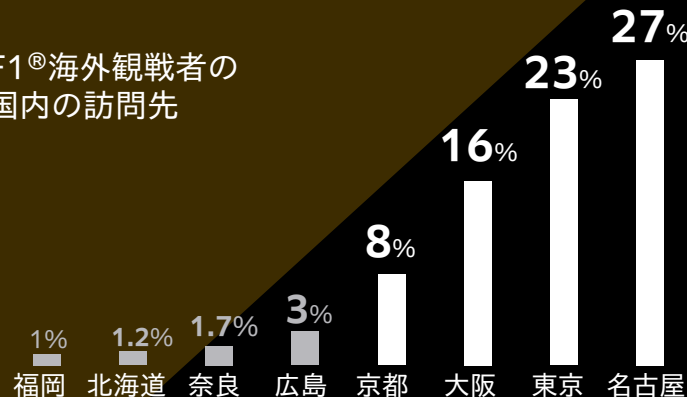
* 観戦券代除く

768,002円



国内での7日間以上の滞在率

F1®海外観戦者の
国内の訪問先



スポーツイベント* 最大の経済波及効果を を生み出す3日間

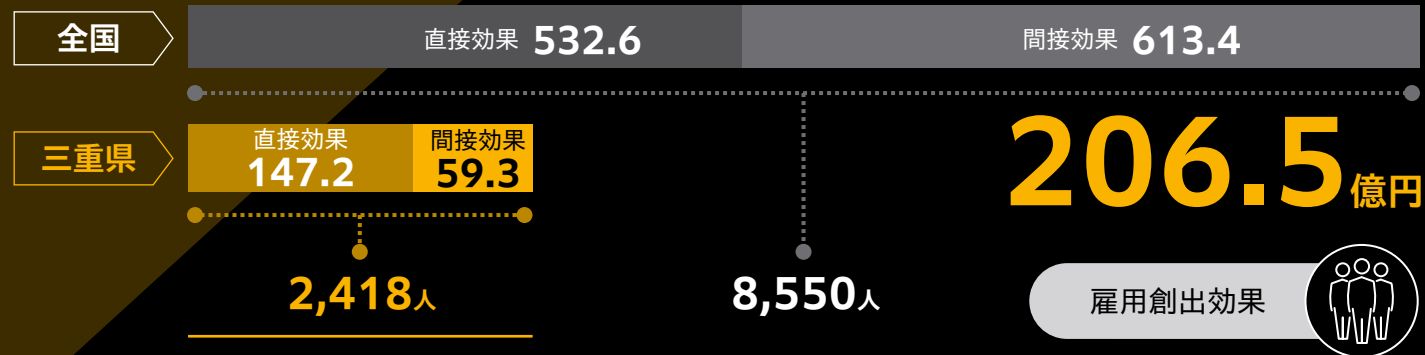
JAPANESE GRAND PRIXの経済効果は、鈴鹿から始まり、三重県、日本全国に拡大し、その経済波及効果は直接効果と間接効果を合わせると、1,146億円まで上っています。

JAPANESE GRAND PRIXの開催によって、国内外観戦者、インフラ整備、大会運営、レーシングチームなどによる支出影響は、鈴鹿にとどまらず、大きな経済波及効果として日本全体に及んでいます。



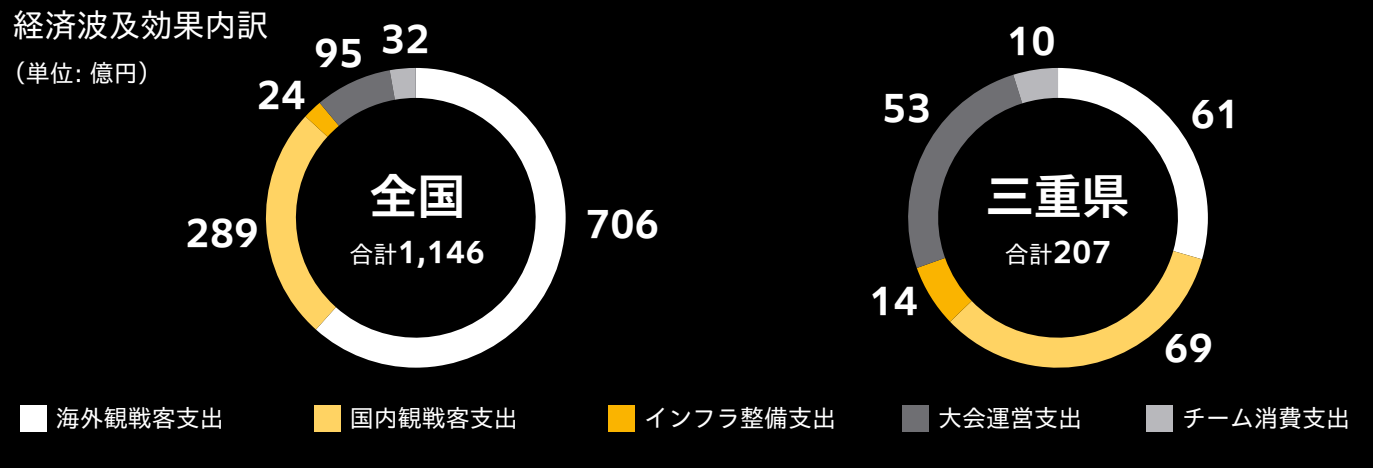
2026年 経済波及効果

(単位: 億円)



経済波及効果内訳

(単位: 億円)



本書における経済波及効果分析は、ホンダモビリティランド株式会社がEY新日本有限責任監査法人の支援を受けて、FORMULA 1 ARAMCO JAPANESE GRAND PRIX 2026 の開催による日本国内の社会経済活動への効果について、日本国内で広く用いられている産業連関表を活用した算出モデルに基づき、国、三重県が公表している産業連関表を使用し実施しました。

経済波及効果の数値は、算定方法や基礎データの集計範囲、消費単価、産業連関表などの違いにより変動します。そのため、過年度などの数値との比較が難しい点にご留意ください。

* 毎年日本国内で実施されるスポーツイベントの一日当たりの経済波及効果

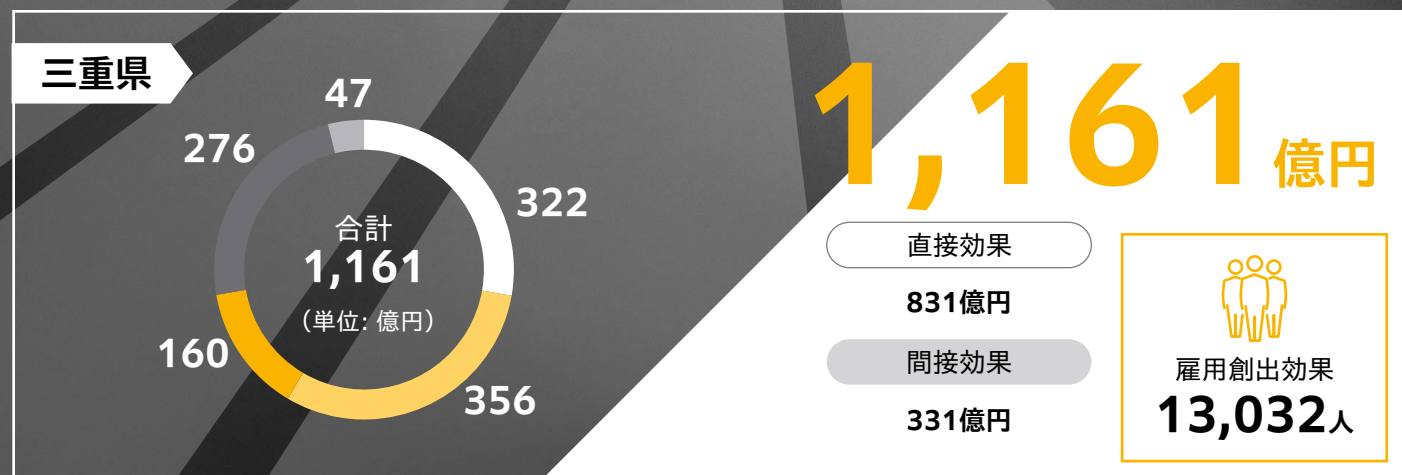
JAPANESE GRAND PRIXが 支える地域と経済の 未来

JAPANESE GRAND PRIX は、鈴鹿での開催が決まっている2029年までに累計約5,900億円規模の経済効果が見込まれています。つまり、このJAPANESE GRAND PRIXが地域や社会に与える経済波及効果には中長期的な価値が期待できます。

私たちは、この成果を一時的なものに終わらせることなく、国や自治体と連携しながら、JAPANESE GRAND PRIXの開催と、鈴鹿サーキットを活用した地域・社会に貢献する取り組みを進めてまいります。

*本書における経済波及効果分析は、ホンダモビリティランド株式会社がEY新日本有限責任監査法人の支援を受けて、FORMULA 1 ARAMCO JAPANESE GRAND PRIX 2026 の開催による日本国内の社会経済活動への効果について、日本国内で広く用いられている産業連関表を活用した算出モデルに基づき、国、三重県が公表している産業連関表を使用し実施しました。本分析を実施したホンダモビリティランド株式会社及び支援をしたEY新日本有限責任監査法人は、本書記載の情報の正確性・確実性を保証するものではなく、皆様が本書を利用したことにより被ったいかなる損害についても、一切の責任を負いません。

2025-2029年 経済波及効果

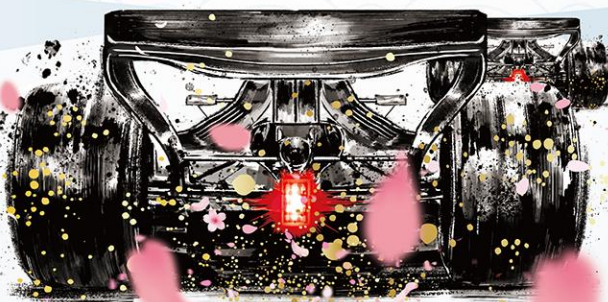


■ 海外観戦客支出 ■ 国内観戦客支出 ■ インフラ整備支出 ■ 大会運営支出 ■ チーム消費支出

第3章

次世代へ届ける 持続可能な社会の共創

FORMULA 1 JAPANESE GRAND PRIX 2026 のサステナビリティ



SUZUKA

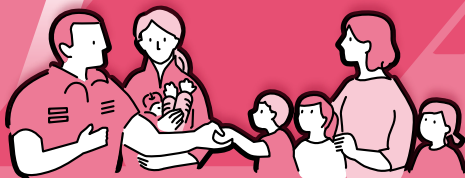
5つの視点で実現する サステナブルなFORMULA 1 JAPANESE GRAND PRIX

ホンダモビリティランドは、企業や地域社会と手を取り合いながら、環境や人・企業、地域社会にとって持続可能なモータースポーツの開催・運営を行い、長年にわたる経験と絶え間ない改善の積み重ねにより、世界最高峰のレースであるFORMULA 1 JAPANESE GRAND PRIXを鈴鹿サーキットで開催してきました。

鈴鹿サーキットはFIA（国際自動車連盟）が求める基準を上回る安全性とサステナビリティを備えた運営能力を有しています。

01

地域コミュニティ



02

資源循環と廃棄物



03

脱炭素



04

アクセシビリティと インクルージョン



05

自然と ウェルビーイング



JAPANESE GRAND PRIX 開催を支え続ける 鈴鹿F1®日本グランプリ 地域活性化協議会

JAPANESE GRAND PRIXは、交流人口の拡大による地域活性化を促進します。その活動を支える組織として、国や県、商工関係団体など官民35の企業・組織で構成される「鈴鹿F1®日本グランプリ地域活性化協議会」が2008年5月に設立し、JAPANESE GRAND PRIXを地域一体となって支援します。



乗合いタクシー
は混雑緩和と
CO2削減に貢献



誘導路や警備員
の配置で混乱緩和と
安全確保



専用レーンで
シャトルバスを
運行

取り組み例

Transport

鈴鹿F1®日本グランプリ 地域活性化協議会 参加団体一覧

- ・ANAクラウンプラザホテルグランコート名古屋
- ・イオンモール株式会社 イオンモール鈴鹿
- ・伊勢鉄道株式会社
- ・一般社団法人鈴鹿市医師会
- ・一般社団法人鈴鹿市観光協会
- ・亀山市
- ・近畿日本鉄道株式会社
- ・桑名市
- ・公益社団法人三重県バス協会
- ・公益社団法人三重県観光連盟
- ・国土交通省 中部地方整備局 三重河川国道事務所

- ・国土交通省 中部地方整備局 北勢国道事務所
- ・国土交通省 中部運輸局 三重運輸支局
- ・菟野町
- ・鈴鹿警察署
- ・鈴鹿サーキット協力会
- ・鈴鹿市
- ・鈴鹿市議会
- ・鈴鹿市商業団体連合会
- ・鈴鹿市自治会連合会
- ・鈴鹿商工会議所
- ・鈴鹿商工会議所青年部
- ・鈴鹿市旅館業組合
- ・鈴鹿市旅客自動車協会鈴乃会
- ・津市



地域の子どもたちや
家族を無料で招待
5市1町こども招待



JAPANESE GRAND
PRIXの装飾
で歓迎ムードを
醸成



主要スポットや
アクセスルートに
のぼり旗を設置

Omotenashi

- ・東海旅客鉄道株式会社
- ・特定非営利活動法人 鈴鹿モータースポーツ友の会
- ・中日本高速道路株式会社 名古屋支社桑名保全・サービスセンター
- ・ホンダモビリティランド株式会社
- ・三重県観光部
- ・三重県警察本部交通部高速道路交通警察隊
- ・三重県鈴鹿建設事務所
- ・三重県鈴鹿地域防災総合事務所
- ・三重交通株式会社
- ・四日市市

(50音順)

地元と築く未来： 三重県経済への 実践的アプローチ

私たちは、企業との実証実験や地元企業との取引、三重県産品の販売などを通じて、地域の雇用と経済に貢献しています。

JAPANESE GRAND PRIXでは国内外の取引企業・団体のうち、地元三重県の企業・団体が半数以上を占めており、地域とのつながりを大切にした運営を行っています。今後も、これらの取り組みを継続・拡充することで、地域企業の持続可能な成長に寄与し、より豊かな地域社会の実現を目指します。

JAPANESE GRAND PRIX年間取引実績

三重県

236

企業/
団体

(全体の56.6%)

全体

417

企業/
団体

地元産品の活用事例



三重の小麦粉「あやひかり」、
四日市川村養蜂場の天然はちみつ
を使用



三重の小麦粉「あやひかり」、
地元企業の御木本製菓が開発した
「天然パールシェルカルシウム」
を生地に使用



地元の三重県産の食材
伊勢海老とおおさを使用

JAPANESE GRAND PRIXが 届ける次世代の学び と可能性

モビリティ文化の醸成に最も効果的なF1®を活用し、次世代を担う子どもや若者に対して、学びの機会の創出に取り組んでいます。

たとえば、JAPANESE GRAND PRIX開催中にはチームとの交流機会の創出や無料招待を毎年実施し、地元の子どもたちにモータースポーツの魅力と価値を伝えています。また、インターンシップや高校生ボランティアを通じて若者に国際的なイベント運営の現場での経験を提供し、次世代人材の成長を支援しています。さらに

2026年には「Honda Mobilityland Youth Innovation Awards 2026」を開催し、多様な専門性を持つ国内外の研究者・実務家との交流を通じて、高校生・大学生にグローバルな視点を学ぶ貴重な機会を提供しました。

招待数

20,000人

周辺地域から18歳以下のファミリーを約16000人、全国のU23の学生を約4000人招待し、モータースポーツに触れる機会を提供することで、地域産業への理解と興味喚起を促します

市内在住の小学4～6年生がF1®ドライバーと交流。

日本文化をドライバーに伝える異文化交流によって学習の機会を提供します

小学生

30人

インターン・ボランティア

117人

インターンシップや地元学生によるボランティア参画を通じて、学生が国際イベントでグローバルコミュニケーションを実践する機会を提供します

「Honda Mobilityland Youth Innovation Awards 2026」

Honda Mobilityland Youth Innovation Awards 2026

JAPANESE GRAND PRIX から地域の食卓へ

私たちは地元の子どもたちの健やかな成長を願い、フードバンクを通じた食品寄付の取り組みを継続しています。各チームのキッチンやホスピタリティエリアから出た余剰食品を回収し、集まった約7トンの食品を地域の15のフードバンク活動団体へ寄付しました。これらの食品は、子ども食堂などを通じて地域の子どもたちに届けられています。

この取り組みは、フードバンクを介した地域貢献の基盤がすでに確立されているからこそ実現したものであり、今年もその思いに共感した多くのチームの協力を得て、実施することができました。



余剰食糧

約 7.0t

FORMULA 1
JAPANESE GRAND PRIX各参加
チーム

収集

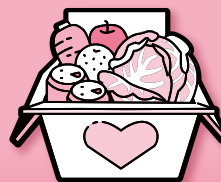
ホスピタリ
ティエリア

寄付

FOOD BANK
(15団体)

提供

こども食堂等



コラム

地域とのつながりが生む支援の成果

支援先団体様からの声

サーキットの食品を活用し、地域食堂や子ども食堂で使わせていただきました。ミネストローネのスープは具沢山で大変喜ばれ、50の方々に食べていただきました。…お弁当を作り配布し、延べ120人以上の方に頂いた食材を配布させて頂き、皆さんに大変喜んで頂きました。本当にありがとうございました。

このような声は、私たちの活動の大きな励みとなっています。

今後も、地域の子どもたちの夢と笑顔あふれる未来に貢献できるよう活動を継続してまいります。



資源循環と廃棄物

分別回収の徹底が、 リサイクル率 維持の鍵

リサイクルの促進と廃棄物の抑制を通じて、自然環境の保護に取り組んでいます。2025年からはパートナー企業と連携し、使い捨てプラスチックを排除したアルミ缶カップを導入。現在、多くの大規模イベントでは依然として使い捨てプラスチックが主流ですが、私たちはその提供を原則ゼロに抑えています。リサイクル率は2026年も46.8%と前年同様の水準を維持しており、全国平均（19.3%）と比較しても高い水準にあります。

FORMULA 1という世界的イベントの舞台を、環境にとってもより良い場所へと変えていくための一歩であり、スポーツと環境の共存を実現する先進的な取り組みです。今後もパートナー企業と連携しながら、開催における環境負荷のさらなる低減を目指してまいります。

リサイクル率

ダンボール・カン・PETボトル・プラスチック・
刈草・枝葉・生ごみ・廃食油・ビン（ガラス）

JAPANESE
GRAND
PRIX

46.8%

53.2%

全国の
平均値

19.3%

80.7%

※全国の平均リサイクル率は、現時点で入手可能な最新データ（2024年）を使用。



廃棄物 発生量

Waste type	主な処理・再資源化方法	2026 Amount (Kg)
混合ごみ（可燃）	—	79,995
刈草・枝葉・木くず	堆肥化	52,970
生ごみ	堆肥化	14,320
ダンボール	マテリアルリサイクル（古紙再生）	19,110
カン	マテリアルリサイクル（鉄スクラップ）	3,817
PETボトル	ボトルtoボトルリサイクル（水平リサイクル）	201
廃食油	再資源化（液体石鹸原料）	300
プラスチック	マテリアルリサイクル（再生樹脂）	1550
ビン（ガラス）	マテリアルリサイクル（ガラス再資源化）	9,135
その他	—	35,240
Total		216,638



資源循環と廃棄物

シングルユース プラスチックの

提供

ZERO

使い捨て
プラスチック容器
提供ゼロ

リターナブル
アルミカップ
での飲料の提供

自販機は
ペットボトルから
缶飲料へ切替

イベントで使い捨てプラスチックの提供をゼロにするのは、環境への配慮だけでなく、参加者に「持続可能な取り組み」を体感していただくことが目的です。プラスチックごみは自然界に残りやすく、海洋や生態系への影響も深刻です。多くの人が集まるF1®の場だからこそ、新しい取り組みを実証し、観戦者の行動変容につなげていきたいと考えています。

飲食店では、
バイオマス
容器を使用

リサイクルの推進 アップサイクル/ 資源循環の例

給水スポット
の提供でマイ
ボトルへの
飲料提供

液体石鹸

廃食油

紙袋の
使用

花壇肥料

刈草・枝

現在のリサイクル方法に加えて、より効果的な手法を検討しながら、リサイクル率のさらなる向上を目指しています。限られた地球の資源を有効活用するためにも、より実効性のある仕組みづくりに取り組んでいます。



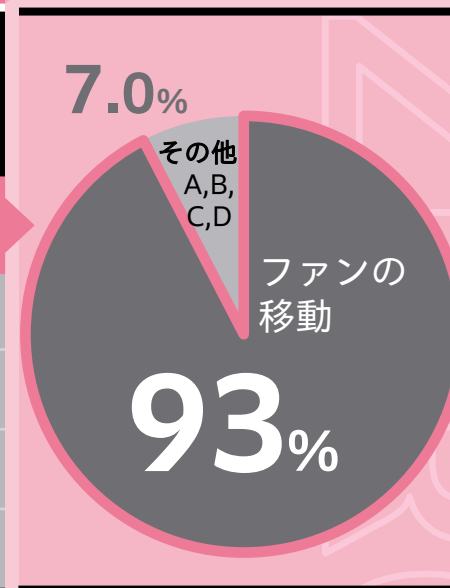
脱炭素

2030年ネットゼロ 実現に向けた 炭素排出量の把握

JAPANESE GRAND PRIXは、脱炭素社会の実現に貢献すべく、2022年から取り組みを進めています。

Scope 1・2においては、2025年にカーボンニュートラルへの移行を果たしました。2030年に向けては主にファンの移動での排出量削減に注力し、人・企業・地域社会との連携を深めながら、Scope 3を含めてネットゼロを目指します。

排出源	2026*1 (t-CO2)	対応 ページ
Scope1（発電機燃料）	0 ^{*2}	27
Scope2（系統電力）	0	27
Scope3（Scope1・2 以外の間接排出）	2,945	
ファンの移動	2,721	28
A ロジスティクス	92	—
B スタッフ移動/宿泊	89	—
C 廃棄物	38	24
D 運営車両	5	—



*1) 温室効果ガス排出量算定方法については、GHGプロトコルを主な手法として参照しています。
 *2) わずかに残る化石燃料の使用によるCO2のオフセットに、森林由来J-クレジットを活用しています。

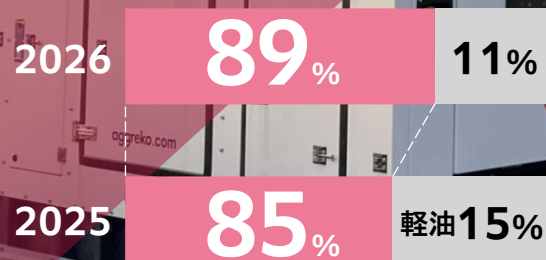


脱炭素

Scope1,2のカーボンニュートラルを達成

JAPANESE GRAND PRIXでは、2030年までに再生可能エネルギー100%を目指し取り組んでいます。場内駐車場での太陽光発電とCO2フリーのグリーン電力購入により、系統電力は100%再生可能エネルギーを使用しており、臨時発電機の89%はHVO燃料（水素化植物油）です。わずかに残る化石燃料の使用によるCO2排出量はカーボンクレジットによりオフセットしており、持続可能なイベント運営に向けて着実に前進しています。

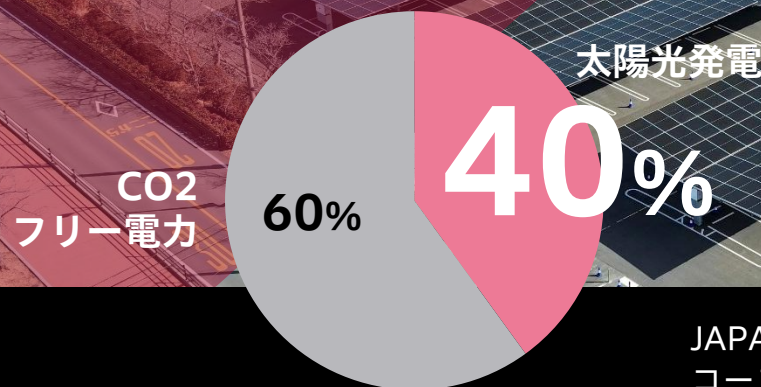
レーシングコース周辺を含めた全体の
HVO燃料使用比率



パドックでの
HVO燃料使用率 **100%**

* HVO燃料とは 水素化植物油（Hydrotreated Vegetable Oil）と呼ばれる化石燃料なしで生産可能なバイオ燃料

JAPANESE
GRAND PRIX期間
使用電力（系統電力）



JAPANESE GRAND PRIX開催期間中、レーシングコース周辺の電力需要の約40%を太陽光発電で供給。



脱炭素

“移動”から変える、 JAPANESE GRAND PRIX のネットゼロ

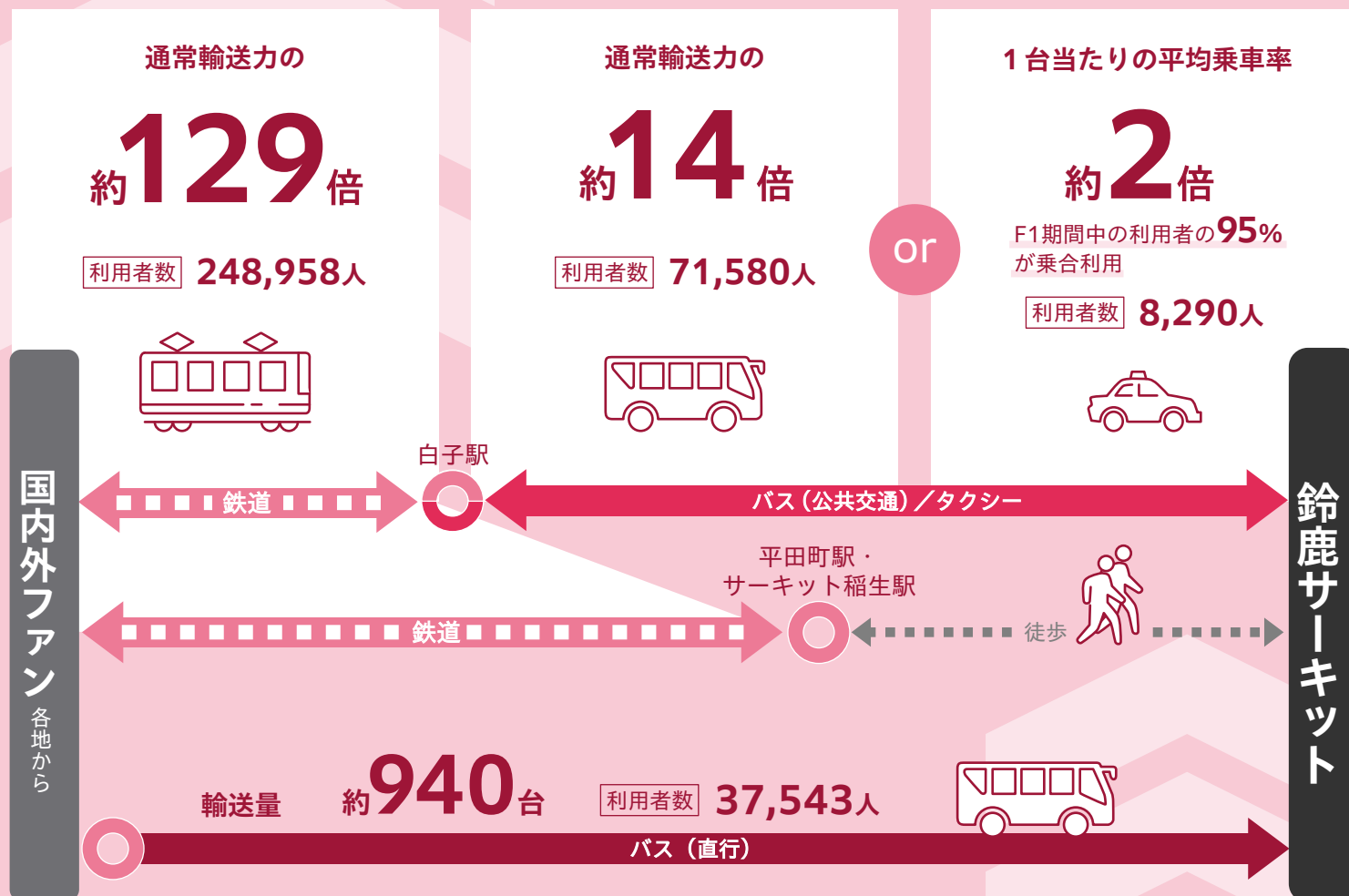
大規模イベントにおいて、ファンの移動は炭素排出量への対策において重要な要素の一つです。JAPANESE GRAND PRIXのファンの移動に起因する排出量は全体の93%を占めており脱炭素の観点から改善の余地があります。

各交通機関と連携し、公共交通機関の輸送力拡大と利用促進に継続して取り組む一方で、2025年に着手した行政機関と連携し乗り合いタクシーの実証実験やライドシェアサービスの促進を2026年も継続し、低炭素型の移動手段への転換を推進しています。

環境配慮型の移動手段で
来場したファンの割合

前年 64.4%

65.8%



移動手段については、2026 JAPANESE GRAND PRIX来場者アンケートをもとに、自宅または入国地点から鈴鹿サーキットまでの主な交通手段（インバウンドを含む）を調査しています。



誰もが快適に過ごせる JAPANESE GRAND PRIX を目指して

JAPANESE GRAND PRIXでは誰もが安心して快適に観戦できる環境づくりに取り組んでいます。会場内には十分な休憩スペースを設け、心身のリフレッシュを促すとともに、ベジタリアンメニューや宗教的配慮に対応したメニューの導入など、多様なライフスタイルや価値観に寄り添ったサービスを提供しています。

世界中から多様な人々が集うJAPANESE GRAND PRIXにおいて、誰もが安心して快適に観戦できる環境の実現を目指し、今後も取り組みを継続してまいります。



ノンステップバスの運行や車いす専用観戦席（400席）の設置に加え、だれでもトイレを含めトイレを増設。



来場者の体調管理に配慮し、会場内各所に日陰スペースを設置。



誰もが安心して食事を楽しめるよう、ベジタリアンメニューや宗教的配慮に対応したメニューを提供。



子ども連れの方も安心して参加できるよう、お絵かきコーナーの設置やベビーカー置き場を整備。





自然とともに 安心できる観戦体験

JAPANESE GRAND PRIXでは自然との共生も大切にしています。地域の風土に根ざした緑化活動として、サーキットの敷地内で生態系に被害を及ぼす特定外来植物の除去作業を定期的に行っています。また、会場内では、日陰スペースの設置や給水所の拡充を進め、暑熱環境下においても安心して観戦できる環境整備を行っています。世界中から多様な人々が集うJAPANESE GRAND PRIXにおいて、観戦体験の質の向上とともに、来場者と地域双方に配慮した持続可能な環境づくりを推進していきます。



花壇は、地域連携の一環として毎年地元の三重県立四日市農芸高等学校の生徒がデザイン。肥料には、場内の刈草や枝葉を堆肥化したものを使用している。



日陰スペースの設置や給水所の拡充により、来場者の健康と快適性に配慮した観戦環境を整備。

第4章

人と自然とモビリティが共生する 循環型モビリティの実践

モビリティリゾートもてぎのサステナビリティ



人と自然の対立を越えた、 循環型モビリティの 新しい設計思想

モビリティリゾートもてぎは、約640haの敷地のうち約65%を森林として保全し、「人と自然とモビリティが共生するサーキット」を実現しています。

開発当初は管理が行き届いていなかった里山環境に対し、2000年の「ハローウッズ」開業以降、継続的な森林管理と生態系モニタリングを実施。その結果、**5,800種を超える生きもの**が確認されるなど、里山の再生と生物多様性の回復・向上を着実に進めてきました。



スポーツと自然を つなぐ循環設計

モータースポーツを含む活動に環境負荷も含めて一体的に管理され、循環の一部として位置づけられています。モビリティリゾートもてぎは、こうした実践を通じて、

人が関与することで森の循環と生物多様性を育む
新しい設計思想を提示しています

森林の循環を体験として共有し、共生・共創へつなげる

スポーツを活かした発信

ライダー植樹を起点に “気付き”を世界へ

スポーツは、国や地域を越えて人々に影響を与え、環境や生物多様性への意識を高める力を持つことから、国際的にも活用が進んでいます。

モビリティリゾートもてぎでは、**FIMトライアル選手権のライダーによる植樹活動やMotoGP™のライダーによる森林保全活動として間伐実施など**を通じ、その発信力を活かした環境意識の啓発を実施しています。

来場者が体験を通じて自然の価値に「気づく」仕組みを組み込み、スポーツ活動を環境価値の創出と循環につなげています。



体験を通じた循環の理解と継承

体験を通じて学びを 次世代へつなぐ

モビリティリゾートもてぎでは、モータースポーツ開催時の啓発に加え、テーマパークとして**通年で来場者の環境・生物多様性への理解促進に取り組んでいます**。こうした取組は環境省の自然共生サイトに認定され体験と保全を一体化した活動として評価されています。

夏の一大イベントである小中学生向けの**30泊31日の「ガキ大将の森キャンプ」**では、森での宿泊や生きもの観察、「森づくりワークショップ」「親子里山体験あそび」など里山管理の実践を通じ、森林の循環を支える仕組みを体感的に学ぶ機会を提供しています。

体験で得られた学びの継承と国内外への展開を見据え、体験価値の発信に取り組んでいます。



連携を通じた価値創出と社会展開

多様な連携により知見を創出し、 実践モデルを拡張

モビリティリゾートもてぎでは、地域・教育機関・企業との連携を通じ、環境・生物多様性に関する知見の創出と実践の高度化に取り組んでいます。

宇都宮大学との野生生物生態系調査や、日本体育大学との子どもの身体と心の健康に関する調査研究、STIHL社やフマキラー社との協働による保全・管理実践を通じて、現場での取組を検証・強化しています。

得られた知見は取組の改善に活用するとともに、他地域への展開を見据えた実践モデルとして発信しています。



今後の展望

ホンダモビリティランドは、地域社会との共創を通じて、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを進めてまいりました。FORMULA 1 JAPANESE GRAND PRIXなどの国際イベントにおいても、環境配慮や地域連携、多様なステークホルダーとの協働を重視し、更なる持続可能性の向上に努めています。

また、自然や生物多様性の保全に関する取り組みをはじめ、人と自然とモビリティが共生する持続可能な社会の実現に向けた活動を推進しています。これらの取り組みは、地域社会や環境への貢献につながるとともに、近年では国内外の認証取得やアワード受賞などを通じて高く評価されています。

こうした活動を継続・拡充していくにあたり、私たちはこれまで支えてくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。地域の皆様、自治体関係者、協力企業、ボランティアの方々、そしてモータースポーツを愛するファンの皆様のご理解とご協力があったからこそ、私たちはこの挑戦を続けることができています。

私たちは、サーキットという舞台を通じて地域と世界をつなぎ、未来世代に誇れる社会の実現を目指して、皆様とともに歩み続けてまいります。

サステナビリティに関する認証・受賞歴

エリア | ホンダモビリティランド★ / 鈴鹿サーキット● / モビリティリゾートもてぎ▲

2002 ▲ 環境省「モニタリングサイト1000里地調査」参画

2022 ▲ 生物多様性のための「30by30アライアンス」参画
▲ 栃木県「体験の機会の場」認定

2023 ▲ OECD認証取得・自然共生サイト認定（環境省）

2024 ● FIA環境認証プログラム 最高位「3つ星」取得

● Sport Positive Awards 2025
「Transformation部門」ファイナリスト選出
● 令和7年度 食品ロス削減推進表彰
「審査委員会委員長賞」
★ 一般社団法人 work with Pride 策定
「PRIDE GOLD 指標」
★ 厚生労働大臣 認定「くるみん認定」

● Formula 1 Promoter Awards 2025
「ESG部門最優秀賞」
● スポーツ文化ツーリズムアワード2025
「スポーツ文化ツーリズム賞」

2026 ● 1st UN Tourism Awards
「最も持続可能なスポーツイベント」部門 特別賞
▲ Sports Positive Award 2026
「Biodiversity Project部門」ファイナリスト選出
★ 環境マネジメントシステム「ISO14001」取得

